



45
6043
5



初冬 冬
承 霜 冰 鷹 埋火 寒梅 年內之春

時雨 茶花 雪 水鳥 神樂 衾 冬鸞 歲暮

下
下
下

茶口切 落葉 雲 冰菓 冬月 綿 年忘 雜冬



返花 寒草 霰 網代 炭 紙子 節分



橫
山
重

小町踊第四

冬

初冬

霜 <small>はる</small> の多 <small>く</small> りりわ <small>ら</small> わ <small>ら</small> ん <small>神</small> 音 <small>月</small>	玄 <small>札</small>
月 <small>よ</small> と <small>れ</small> 神 <small>の</small> 為 <small>ま</small> に <small>け</small> 紀 <small>老</small> り <small>の</small> 那	智 <small>徳</small>
か <small>雲</small> 乃 <small>清</small> あ <small>や</small> く <small>や</small> と <small>風</small> 此 <small>神</small>	同
と <small>物</small> り <small>り</small> の <small>邪</small> 正 <small>一</small> か <small>う</small> 神 <small>無</small> 月	正 <small>文</small>
冬 <small>れ</small> ま <small>と</small> 小 <small>妻</small> や <small>霜</small> れ <small>花</small> ん <small>月</small>	正 <small>則</small>
雪 <small>花</small> も <small>く</small> よ <small>り</small> つ <small>り</small> じ <small>小</small> 妻 <small>う</small> か	方 <small>寿</small>
月 <small>小</small> 乃 <small>く</small> て <small>冬</small> の <small>ま</small> を <small>り</small> 霜 <small>柜</small>	意 <small>霜</small>
小 <small>妻</small> 母 <small>の</small> 印 <small>く</small> く <small>團</small> 爐 <small>寒</small> の <small>火</small> 花 <small>外</small>	貞 <small>因</small>

雲跡乃方便いくく神乃あま
うそらくわ雅然くり神ま月
昌房 春行

時雨

じくくく時あるくわくそくらく後乃鹿
けく雲れ後といまのれ時あるく舟
天氣くくくわくりくりく村あるく
くくみくくく時あるく乃く雲く水くくく
二れわくくくもくくく某くをくりく一く時あるく
時あるくわくりくもくくくすくみく神ま子あすく
山あるく乃くいくそくけくくくまくらくりく時あるくれ
同 同 知徳 幸和 重頼 宗祐 一正

三回忌遊書

山くくくとく時あるくれくわく一くくくけ
去くくく年く乃くくくくくわくらくりくおく時あるく
くくらくりく某く時あるくわく雲れ水く車く
おく百く度くとく時あるくもくくくわく神ま後乃山
時あるくてくいくいくそくくくせくりく雲れはく
去くくくりくいくゆくとく色くくくくくくくれく舟
くくれくくくらく冬くれく氣く分くれくなくもくくく
川く寒くわくいくくくいくくくくくしくくく時あるく
八く雲くくくのく神まれくじくうくわくおくくくれ
深くのくくく乃く時あるくわく松のくくくくいくくく
神まとくくくとく時あるくくく一く旅のくくくく一く飯を
元清 不競 重則 重徳 重賢 重頼 正後 貞因 常長 常辰

町多しそ縁を祚のすまじり
 川音れふられや先りり多車
 袖の今ささまりことのふくまうれ
 松風乃町多やうそ此琴の曲
 町多しや近鹿あうそ木の葉様
 雲風いたる空耳此さよ町多
 一先りりさう〜ぬ袖のふれうか
 呈押うかさうらさう乃う〜
 志先りりてし町多やめらう茶磨山
 としてすうの祚耳めあよさよ町多
 志先りり水れみさう〜おふくれ
 同 友貞 同 同 有哉 素言 親信 信世 犁

川音や耳〜さう〜初町多
 廻文の作やふられと寄此程
 園か〜ね物状うそ月よ町多れ
 めらり茶磨町多やふれととり歌
 夕多らとこ〜一対のわ〜
 川音のうら〜さう〜ふられれ
 善の町多らら〜事此葉の茶磨外
 同 昌房 同 三園 為親 政之 宗雅 魯之

茶口切

口切り町多証さ〜ね善茶う那
 炉丹登のふ〜えめう〜小善うか
 徳元 不卜

冬に日の茶の湯に甚く清なるれ 廣宣
 君やうん我や雪に日茶の湯すこ 祐巳
 夕よとにわすし雪小そ粒を此友 松尾 弘次
 にもしまや雪物も分て粒を乃友 不知
 口切いさう〜人〜と共壺う那 貞富
 口まりわこれもとわおの壺此凡 眞真
 茶此湯名とまて〜は解り路次此雪 定親
 口切や炸〜りも印〜く床乃此 政之
 大うくの茶此口切も小まうれ
 口切の茶も花香あり小春う那 昌房
 口まり此茶〜久らるわ人心 立圃

返花

君あり〜おひ〜ま〜や小まに〜り花 元知
 世の中〜に結て様やう魚りむ 政也
 人^遊そらまき木〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら 有哉
 名木も老く〜愚〜やか〜り〜ら〜ら 正利
 茶木も穠廻〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら 眞安
 小ま〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら 業政
 冬木〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら 寺地 俊康
 賢も〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら〜ら 棟善

尊賢品とくや浄法乃くへり毎
老の才れ秘りりしきうか返りいふ
廻文や人乃云茶れう魚り花
受仙
資方
昌房

歌

三門つまうまれ月実乃日取餅
白黒やめれうゆら紅砂糖りら
立圃

茶花

はやめる紙先袋茶乃花香うれ
茶花花をらうてう魚らね昔う那
正直
尾形
重行

茶れらるいのもて月まらに白ひうか
茶乃花乃梅か
一武
定親

落葉

あうくいのゆふおしく飯木れ紫うれ
木れ葉のらるるにや岩の産
木の葉をら若れ衣乃ようきね
赤去にひらう紅紫乃らるる山
晴天れ白や木れ紫の香解やう
空舟あうわらうるい木葉うれ
十月の木の葉れ白若ら月う那
弘永
知徳
夕翁
宗富
利清
久定

春風のり来りくも今も落葉を
松葉をへるくともすみの町ぬき
春原の木は葉のぬり目てりうれ
とや下りくもこれ葉落と春の
葉は木乃落葉衣や丹波布
月よりくも風易紙さるる落葉れ
風乃非れ葉をゆりりく木は葉れ
ぬれぬ紙衣くくいの木は葉れ
山風のり来りくも今も落葉を
松乃葉ふかぬ木は葉やほまじ
春のくもみ葉や風のぬりくも
常原

元清

定昌

正賀

大松子
次良

謙也

慈仙

春行

定親

来安

同

常原

泉ありや木は葉の落れぬりくも
木の葉をそくくかきく一町ぬ
白くかり木の葉衣やひと志わ
山道の木の葉をそくこれ道同く
雨風より化すり木の葉は天物れ
浦水のくもれる白くも木は葉れ
お葉をわらりくも仙家乃雪の文
同

好与

政之

宗雅

美立

昌房

立圃

同

寒草 付枯葉

冬暖ハ伽羅のうきりや菊乃舞
冬枯のわらりくも白くも木は葉れ
同 好与

うきゆく八百一十と耐る盤
茶乃湯者わたる見のそと水仙花
雪う又それうあ〜ぬうあ仙舞
暖氣〜してさうれぬうや萩の屯
嶺利
重頼
親十
立圃

霜

石丁つ紙けくくたつらや霜〜ら
山窓や尾との霜れきつりか
霜れ花のこりとい果乃〜や〜か
霜〜〜ら〜り〜とやうねの形
光陰の矢〜ふた〜〜霜れ〜と
宗壽
貞徳
同
信光
栄貞

とらき〜そと多分か〜ぬ霜〜ら
〜〜神色乃花〜やぬまの〜れ霜
〜〜日紙〜るに曆う霜〜〜履
町中や霜ハ化てや滝め〜と
鐘〜霜天地和合の〜〜まうか
これを種本曉うけ〜霜〜〜ら
表〜と堰〜り霜〜〜と〜と踏
恒て測〜と〜り〜霜氷の氷う形
〜〜〜〜と〜〜〜霜や霜板
鳴乃霜ハ粗女〜三井〜れ種
町人〜〜〜〜霜や砂土走
重成
定成
弘永
遊石
弘次
貞盛
池崎
成政
和判
親則
冬貞
智詮
宗言

とくそわすきんかきそつもの勢
 うつたれしう海も君のまはれまうか
 根継し新の津らうくそ君相
 日のおまういしきまうしりすわ君花
 夕子うりわ君はらうく月うら
 い月れ名おしそくそれ君うら
 津のう移わ寝年ふらうくそ君は
 うくそまの神れあわさう君うら
 大地より涌かおく君うくそ
 うくそ此乃橋くおなうくそ君相
 髪とされらうくそわ代くそ君の松
 同 同 同 同 同 同 同 同

けり種のをさきわ君の花さうり
 同

雪

めくけくそわらんくゆ家瓶
 尾と白くわくそ白く富士は雪
 白雪れらうくそくそ雪けあそ
 鳥踏しわくそくそ雪のけいたふ
 本舞野の雪うりりくそ富士乃山
 初雪とこれといくそわ若くそ
 煙少とくそくそ白く富士は雪
 津もあわりくそわらんくそ乃後山
 同 同 同 徳元

まぐれの雪道くまぐれ崎の杖 同
まぐれ積の糸雁やみ川六川の苑 同
富士たてまつる一木くまぐれ雪乃山 貞徳
くまぐれてりんくま雪ふらくくくく 同
山姥のむくくく雪状く川まぐれ 同
雪の真天乃わくくこれらぬく佛 重頼
浪雪や雪た衣乃ぬくくく綿 同
田子丸浦所出く富士の雪孫 同
くまぐれくま本國く雪佛 幸和
雪の結ぬくくおけけりく富士た山 同
雪やまのあまいそくくく富士乃雪 同

わくまのくく月くくくくく 庭れ雪 云明
晴松乃いくくく雪乃あまぐくく 照星
雪くくくくくくくくぬれ雪くく 長吉
りり雪のくくくくけけけ本履くか 信澄
くゆくくくくくくくくくく雪の雪 氏重
松雪乃花くくくくくくくく雪 色
あまぐくくくくくくくく雪の雪 暮
浪雪や男松女雪れくくくく 寮
枯木くくくくくく雪の雪くくく 吉久
大雪くくくくくくこれ甚かくく 三直
くくくくくくくくくくくく 宗英

いけりるればさしひく雪の芭蕉布
天竺と目乃ふたはまら雪乃山
長孫や日くひくからる雪れ井
おもひおどすうれうの雪乃水
綿小針或つひ心く雪乃素
三圓のつひくうや富士の雪
ふぶる雪やほくわてうーた山
八えりれうーの涼雪や白蓮花
白壁や雪の中うーくぬ雪れ宿
ゆーひくうーうけいー彩の雪
うき木もわ花咲美のつ雪霞

當直
親光
正直
同
同
弘永
同
重言
空存
正信

いぶる雪量よ佛や富士れ雪
わさ花とらうーくうーやまの雪
水練りー同一体や雪解けり
天くらうーくう花うー雪れを
ゆりつひや丈六尺乃雪併
かきられてありらる雪や雪と云
ーのうーくぬさうりあー富士れ雪
余のゆや雪ーうーうれうーの雪
白雪と雪ーうーくれ兼毛う那
冷のーくハ白さぬ雪れ屏風うか
うーくー世のうーくわ化ーて雪よ

定春
意敬
可勝
盛親
元後
正武
延貞
道二
一滴
利信
一香

ねりしるれ蒸のこわらわと新れ雪
 雪の楮はけくぬる雪は花軍
 あらりけくふそれく世具の雪女
 面白さらうらぬ雪れくはてはるか
 天送くしゆくしゆ行や雪の花
 未送く雪くしり下海雪佛
 雪山のままのこくゆしる雪
 萬本れ継やとせうくや雪は毎
 春くしりし葛城山乃粉雪れ
 人間のこくゆしぬそくや雪女
 雪のまもくしりく愛や市女呈

利富

重延

后直

信豊

養節

玄礼

一通

一武

貞盛

成元

清等

留古の雪とありて折し田子れ京
 馬をこれ給もわ雪乃道とく人
 と新しうらあしり源子う宮の雪
 少りぬる惟子雪やさか乃山
 源はもり雪くや松とくこれ登
 朝くかうさうりいぬ乃む川の死
 おりしるや雪ふくしる白鳥
 雪はけくし女の袖く雪乃や
 小宮わ封してあけぬ今朝の雪
 家の麻子冬は白結くしるの雪
 雪くしりし雪乃雪佛

廣寧

夕翁

重成

清讀

員久

伯貞

年光

珠女

雪隆

正長

雪乃

雪の垣ハ雪ふらりりー白くさ
雪や又あこ花さくね奇乃種
しら雪母又しらさく白砂糖
まけ入こいじて風のこ雪か
丸物のあそびさく雪こ
雪白ー各ふ世果冬れ文
一あわぬ色ーゆら六乃舞
葉くさくさのふれ雪わ白じ
枝かりゆらぬさくわ雪れ花
雪かしじ雪わそのま白さく
雪送の日記ーハ段乃行者これ

重良
重以
季貞
知徳
利安
高教
正聖
茂昭
正辰
宗次
重利

あかーれりさささかーこよ食雪
えほとあさみさぬものわ雪女
唐綿う打おくえれも富士れ雪
糸にしろ物さくさく雪の綿
しらーや雪送うらさ乃始小松
しらーの雪おまけの葉移うか
のけささののるや雪送下り坂
旅人の富士乃雪らわさ登りの
よのつーあさく雪わ雪餅
後乃雪女雪のけさくわと雪れ雪
雪れれけわよの雪とあかり垣

元隣
直依
由的
教次
武英
紹意
岩城住
秀生
重武
忠次
宗甫

とうね草いほく一雪乃花れ庭
 久保
 村都
 久保
 友静
 人々海一名色わくくそ雪女
 佐野
 安次
 雪折の行もうとせれうひくれ
 町田
 未覚
 山ありく山あれとわ不盡の香
 白雪乃うりあさうりや富士れ雪
 雲より富士冬もわ藤子もく雪
 雪れあやさんこたのうら松乃終
 慈仙
 雪やと翁是三世若別月と花
 如月

雪に今朝うら袖うらぬ坪は
 名もと細とわい雪白くさの山
 雪れく世わ後方実相雪何れり
 わくわく雪れ山路のたかりうか
 松うらうら伏え常盤う雪女
 跡つげく雪小い何乃うらうら
 雪れ日やいほくも雪れくれ里
 仙洲う行り母花咲雪乃文
 雪と墨巻をくく富士の山
 煙うりやう塔庵うらうの雪
 雪切の葉うらう雪わ一乃白

雪に今朝うら袖うらぬ坪は
 直可
 名もと細とわい雪白くさの山
 信元
 雪れく世わ後方実相雪何れり
 同
 わくわく雪れ山路のたかりうか
 立派
 松うらうら伏え常盤う雪女
 斤山
 久勝
 跡つげく雪小い何乃うらうら
 大高
 重善
 雪れ日やいほくも雪れくれ里
 吉里
 仙洲う行り母花咲雪乃文
 忠知
 雪と墨巻をくく富士の山
 斯祐
 煙うりやう塔庵うらうの雪
 頼永
 雪切の葉うらう雪わ一乃白
 坂岸
 重次

たうぬ雲いほく一雪乃花れ庭
こころいほくも濡るる袖の香
これういつとれん人の香女
人ういほく名もわくはくそ雪女
雪女の汗もうとせれういほれ
山ありく山あれとわ不盡の香
白雪乃うりわくはくは富士の雪
雲より富士もわくはくはくはく雪
かへくはくはく雪よ志留せ文界
雪れあわくはくはくはく松乃終
雪やと終是三世若別月と花

村都

久保

友静

安次

未覚

如月
慈仙

雪に今朝うら袖うらぬ坪は
名もとぬとわい雪白くはくはく
かへくはくはくはくはくはくはく
わくはくはくはくはくはくはくはく
松よりうらひ伏え常盤の雪女
跡つけくはくはくはくはくはくはく
雪れ日やいほくはくはくはくはく
仙洲うはくはくはくはくはくはく
雪と墨巻をくはくはくはくはく
煙うはくはくはくはくはくはくはく
はくはくはくはくはくはくはくはく

直可

信元

同

立派

久勝

重善

吉里

忠知

斯祐

頼永

重次

白玉の雪
 松の雪
 雪れ日ハ羽白と
 天よりくく
 我々の雪
 賢人乃心
 少く袖の雪
 餅か
 吹わく
 雪く
 大雪の

九定
 重良
 親信
 久忠
 同
 同
 同
 方女
 同
 吉定
 清平
 同

けり花の雪
 あり神の雪
 目此
 一
 鳴り
 わの雪
 雪ハ玉
 恒電の雪
 屋モ川
 雪乃
 山鹿

方孝
 宗雅
 同
 同
 同
 同
 同
 同
 同
 同
 同

言花枝振行とかなむの推うか
 めのりて言花のこころや六のふ
 しのねまの心乃ねや言れ枝
 一統の天下やあつた言乃りり
 わの申子あやいこみそれと書れ女
 心振や一こりりれ言乃女
 富士山の雪とるるや九折
 童部れらるる車一う言りらわ
 入くあつた言れ行やいこみこみ
 新に待小貴まふ山一雪の富士
 中流ととつとれく一月富士れ雪

好字

同

有哉

儘

同

同

衆言

同

後立

友貞

同

道乃くぬ雪れ山あや道とるり
 月小みま念思や交して言女
 白濁や雪れとらるる国乃女
 天孫と雪やまをくれぬ手向花
 雪勢は根たふもるるや富士の山
 小つらや露言霜のこ回忘
 雪よりこ心取字れ忘や雪一季
 夏冬はま雪れとらるる言解
 雪ハ敷地ハ白昼一雪乃道
 甲列して
 甲斐と海とまらるる由も同一富士れ雪
 小佛のんこ一や富士れ雪佛

同

同

常辰

同

同

同

昌房

同

同

立園

同

白雪のふらふらと富士は黒く
 富士山乃雪よりわすらうをたけ
 色蒼葉のそれ、あゝぬる雪女
 夫人や雪結ちるる舞の曲
 去れ花く雪の冬もわさ後者
 八重の留とれ根いり六れむ
 くらわさかぬかぬる雪わい
 雪より結ちるる雪のゆき
 正美の似せりり本とれ雪乃花
 同 同 同 同 同 同 同 同

霰

雪れとしゆきせみその酒は解
 雪中ちるぬ雪もくらぬ酒
 光有 立園

霰

塵をよりゆらわ放下乃玉われ
 玉よりも酒ふあゝゝをたけ
 むらけく玉にけり野の雪はれ
 多れ内てうらうらや雪の玉はれ
 水晶と委わわれの玉はれ
 雪より散あゝ雪ハ風れ玉う那
 子代とつる天はらんれ酒
 宗祐 貞徳 同 塵哉 信元 元清 宗房

氷うらふにまゆらわれや玉よ恋
 まんねお玉より新あつる愛うか
 氷内てうする愛や氷れ中
 氷うらふにれそく氷水面鏡
 空て雜下りあふことや玉あふま
 咲と終われや実極言乃花
 木の葉うらふに天物つあてま
 面白くうらふと心後りたるあふま
 空ハ河これと心河ふふえ陽うか
 同 同 立女 立園 正依 就武 智鏡 久忠 元清

氷

川つらうの手扱とるにこわりうれ
 一めん海と人ら向う下りう那
 じつとまこれ糸と珠粒の歩うか
 薄氷とるふ下くや紙屋川
 岩うこれけらうや利劔不動坂
 薄氷と少じいあつるま日わうれ
 氷と池池を鏡れわうう那
 多揃りしと少くさう歩うか
 菴にえ水ともうさぬ氷うれ
 古川母あみたれわとるや厚歩
 袖のくくじりう水やう那
 當直 貞徳 徳元 良徳 可均 光有 秋廣 貞室 忠重 重後

吾水垂雄少川の流るるか
 歩てや昔入とせぬりり川
 教言や曇といつらん少面流
 教生と少のどしり川遠う那
 常一強のわみ少家を此水
 わてはくのみられり立田川
 玉眼の文珠うらわらうま
 川口れりり書とやう少うか
 波乃段付う池のら月星う那
 とうねも水乃劔やう結立
 水神も閑帳うう厚うりり

宗清
 三重
 重次
 秋月
 随巴
 首
 政良
 重次
 就武
 了閑
 方孝

叢法う江の浪れあ川とわ
 蟹穴の道しとせらる少うれ
 きてる流う川うまうう水う那
 とそれくわらう少も玉のう
 る少りく地うまうてう少うか
 新米母うういそまうり流う人縄
 流の糸流ういしといふう水うれ
 流乃勢石ううわうぬ川流うか

嶺利
 同
 宗雅
 清下
 立圃
 同
 同
 同

水鳥
 鳥少ういひあわううう子うり

文英

淡路うこ通しや淡子鳥うけ
 系り田舎わあうん系や都鳥
 けり芦れわあうんや都のあうん
 うり都うあうんうり淡子鳥
 水もや淡うりゆらんあ川水
 浪風うあうんと申しや女鳥
 一とわうりあや千里う淡らと
 雲とあうんかあや中うあ子鳥
 じまわうんやあうんあ子鳥
 芦鴨も淡子鳥うりわあうん
 うりうりあやあうん波れわ

徳元
 重頼
 良徳
 宗朋
 秀重
 貞室
 一入
 有也
 徳窓
 忠田
 云矣

難波うこみしうあうんあ鴨うか
 月のお母あや一帯れあ子鳥
 浪松ししてうを新うあうん鳥
 寺せいのあうんあうんあうん
 越川と濁うわんもらうりあ
 水鳥のうり新や波のうりあ
 浪のうりあうんわ子鳥乃是拍子
 意れ目あうんあうんあうんあ子鳥
 あうんの羽風や波のうりあ
 鴨うりうりあうんあうんあ
 水鳥のうりあうんあうんあ

幸和
 玄且
 正重
 定行
 廣寧
 知徳
 同
 春極
 玖女
 重澄
 山
 後久

之波のこ糸うーとまきわ響れ昔
 言浪う響ととく海く子きうれ
 響響れつとゆわきとくわ波うく
 あまの麻やうわりのわ川うみ
 友千鳥中うたわ糸川おと川波
 ゆく水うく救うく鴨のわきうま
 ういけうわやうわ流の波うく
 うらうや一河のわうれ友子鳥
 わいれとくわうくわ酒の友らとく
 水きとゆとくわうくわ磯のうみ
 あまう女鳥男うくわやうく乃響
 政之
 響子
 信世
 兼言
 同
 同
 定親
 同
 友貞
 友静
 塵哉

波雷うーいつとく其鴨羽白鴨
 水きう波るの海士れ赤うーら
 響の羽もたなぬ夢のけうとくれ
 とく響れ名とてうくうくわ波乃響
 地中わうくく比翼もわくわ友あま
 あ鳥れまうくうく魚うく磯乃浪
 水き浪わうく日うくこれ角りか
 長池うーとくひうくわ鴨れわ
 年うく乃響とく事うく乃響とく
 昔響れこれとくうくわ友あま
 同
 同
 同
 同
 立圃
 親信
 有哉
 重良
 嶺利
 宗雅

水雲

細乃目録中けゆく水雲や鶴の口 有哉

細代

かいほやり細代は浪やせうら 業和

鷹

それゆく状為のよ家やのり二言 宗明

鷹の尾も十二一重れかよりくれ 宗利

ひら鳥とえつげく鷹やさうぞう 粉 定義

あすくといさう〜そら鷹は魚流 種田 正春

よまうけてあつて何と鷹の言 林元

阿事や雲丹くらくくに鷹は落 未元

行方流あつハ驛路く鷹の於 親安

教く〜あつて鷹やはけうと鳥 信世

逸物やらん流そ〜こね鷹は言 同

罪科の〜それ〜ハ鷹は言 宗雅

逸物ハ何も鴨と鷹は言 同

逸物乃鷹や月が〜ハ貝あやの 立圃

神樂

かして向と神系し女れけさうふ 金一

水神のから〜る鞍う流乃言 信元

灼玉し、風於や風の神あつる
神の威や行もさう人のさよ神系
麿哉 俊岸

冬月

雪れ舞かおつる月や白祢すも
行りしうし又面や一月と雪
臘月の文字と人月のわすみこれ
まぐち雲さうかり終雪まれ月
さびうしきそそ月夜の物
うらやまうしお月とく記光うか
月影とさうし是かまわうしうさ
啓 一村 芳昌 吉保 吉久 重因 吉里

松風の河をり照やうそ月夜
月影やうね雪らる世目を自
墨とぬる十夜のみや河跡及登
常辰 宗雅 清下

山炭

白すもいっしうしう踏雪のたそふ
白をみわなうねじうし雪乃枝
せしこなりや一夜白髪炭うしう
さしうらましく心とにた炭火つか
いろりたにも名かうつまわや沈田炭
白炭すしと縁かうす燈厚くれ
徳元 忠知 教次 重頼 和守 重貞

光の勝ハ名一そまれていろり炭 一甲
 烟よりあつたれおしすまわら 皆 春良
 歎炭いた火福すものたろひろか 毛下
 車産乃友や火神れまらり炭 富平
 並炭も別冬のをいろり炭一 重良
 とのつろ松の糖木炭りーら 每 親正
 とまそつろ炭の火花れはろろか 大坂 重寛
 言れ日や陰より陽とあろー炭 信盛
 床ろろろ火あも火花や比田炭 常展
 炭ろろろもろろ兩天約ろ黒ろろ 立圃
 ろろつんと左にいそけしまるり炭 同

炭竈やさなりろ山乃ぬとーろ大 同

埋火

火火今く埋りわろる火燈也 知徳
 炉れ内の白ふの炭や香のーれ 徳順
 白ふもかこれの赤とろろろか 兼言
 炭かろろは屋ろろ様よこーの火 定清
 朝もろ地起ろそとけろいろろ火 愚道
 神の本れ地之とわろ焼火の間 愚道
 火火野も中よりろろろ火神 正行
 寝ろろろも火火ろろろろろろ 大坂 宗信

寝まふれてまうとそらあての
宵くいにまてりつわら火桶の形
ふけこの皮ともわつる火持のれ
ふらむらむにまらふの火桶の
ふとわてくまをばぬせく火持の
うさうさうと埋火とまらる所
郡山住
夜冒
有哉
未安
衆言
常長

余

うらわらと縁よけおえゆの世をぬらん
ふれ子孫十重つとらるわ紙の上と西
冬も実あつたものせと雪の下
廣寧
可休
當

と下に助られ今りあふと西
重昌

綿

わき風あてくくくく子子子
行よ子子子子子子子子子子子
小長めとくくを始する綿子子子
かこくくわ綿子子子子子子子
疎
長之
常長
玄圃

紙子付頭巾

僧人のつとてたらきる紙子子子
まひわきは今肌着と紙子子子
以管
長知

らきれらか肩力と袖も古緞子
とのつら〜ゆ〜とぬあ子か
貧信れ緞子とのり乃力か
恙わらぬと肌と金下る身子れ
朝雲 信世 知徳 一笑

寒梅

羨下らわ々よつら笑乃梅下る
くやこのいりばらら〜冬玉梅
寒言 季吟

冬宴

冬れ節お入うららとれ奇りか
索嘲

冬七五

冬れ〜あ乃ら〜き乃中
嶺和

年忘

竹のうら〜ぬんや年とすれ
改えやんら〜文字れ忘
ゆひのぬれ〜てららや年忘
盤得ら愚癡〜らりてやまら
老ら〜ら〜ぬ酒業や年とすれ
わら〜ら〜いぬ〜旬わら〜ら〜ら
々〜ら〜の酒〜ら〜の年とすれ
貞園 知徳 吉音 満直 老 昌房 立園

節分

鬼はそと福はうちての小槌うね
 豆からの夜船は春と宝病うね
 うらやういせいのしほ坊ね女鬼は
 きてわらふ舟わらううううの言
 今宵鬼目ううふま酒酔うね
 言ふた船やぬらんの時うね
 鬼打といふううう除ねたま
 言分のたまやまうう年うね
 言ふたのうきううて冬うね
 うの言はううう鉄炮ううたう
 同 同 同 同 同 同 同 同

冬廿六

年内立春

正月内のまや節屋位佐保姫子 祝

歳暮

年の夫地的乃村わけううの言 親直
 来んまといつても東とちううね 貞室
 けまのううれ矢たうねんうう 同
 むううのうううううう年の報 幸増
 けまのううううううううの報 重芳
 けまのううううううううの報 宋成
 月くれ月やまううううううの言 宋清

ちやくり年ハ天狗の矢取うか
 鼻のくもろわくはまは津くれ
 去とをれちちり埃や一ようこ
 年かまきまきれりり世方うか
 大年やうとて言してわ丁の春
 久せくいのとて言はは年乃言
 けしりれかまき世こり年の言
 年の矢の矢とまのうまよれま
 来んまと流もわた乃故じうい
 日れまわいそそまうら年の言
 せ欲りう人もかしりやとて言
 梅盛
 重頼
 久任
 貞因
 同元
 季吟
 大友
 泰重
 友我
 祐元
 順三
 志

三十一

質れうかうう年れううう
 うみうせかてぬまわうと浪
 若死やまにこてぬ年の言
 質もくかかううう年のい母所
 去れ日もしうあうとあわ年れ言
 定親
 同
 常辰
 同
 立圃

雑冬

かし風ハ日れりてまてのまこうれ
 わうううハ日れまててういこてか
 枇杷の花実一面うさうりう那
 ちまううあ色ん母まは花んれ
 幸和
 春可

空に東の半斗の山に寝酒を
 冬に夜の多んや夜はあさ
 凍るはうりけなれ冬野に
 借紙の淵はうすねらわり
 秋静に全副夜又く小まうり
 冬とらわふ字小書と雪の突
 小国に雪は程くや糖乃突
 冬とてかうらうやと小とら
 冬とて曉くけく静たき
 冬とてうらうや深うと額中
 冬とてかうも額中てうと冬と

積列
 政義
 貞室
 宗畔
 季貞
 随口
 長依
 宗静
 宗次
次良

又統也九終

夏
 下はまに二階のいう舟のさうす
 い浦いじへも冨くうりうの録
 けうぬ静やいなをぬれ去まうれ
 ねいふこそさむさう人のけう衣
 冬に紫や冬うまもせぬけり庭
 法の花もさうり咲く清氣後
 山窓や小うさうりれ冬う人
 わうさう湯紙あふうらう人
 待の友や多くう酒のを作中
 冬木もわいけては床の花れ去

伊左
 信尚
 重頼
 正重
 尊為
 吉泰
 常辰
 嶺利
 信世
 玄圃
 同



